

5th Anniversary

Kobe City Eye Hospital
NEXT VISION
VISION CARE





神戸アイセンター開設5周年にあたって

神戸市長

久元 喜造

Hisamoto Kizo

神戸アイセンターが開設5周年を迎えましたことに、神戸市民病院機構理事長橋本信夫先生、神戸市立神戸アイセンター病院長栗本康夫先生、公益社団法人NEXT VISION代表理事三宅養三先生、株式会社ビジョンケア代表取締役社長高橋政代先生をはじめ、関係の皆様にご挨拶を申し上げます。

新型コロナウイルスの世界的流行以降、眼科の専門病院である神戸アイセンター病院においても、患者の受け入れ制限等さまざまな困難やご苦労があったものと拝察いたしますが、今日を迎えられましたことに改めて心から感謝申し上げます。

また、皆様におかれましては、神戸アイセンターに対しまして、これまで多大なご支援を賜っておりますことに、心から御礼を申し上げます。

神戸医療産業都市では、その構想の当初から再生医療に取り組むべき主な研究分野のひとつに位置づけ、理化学研究所等の研究機関や企業との連携により研究が進められております。なかでも、神戸アイセンターは、再生医療の迅速な実用化を実現するため、神戸市としても国家戦略特区の活用などにより積極的に進めてきたプロジェクトです。平成26年に実施された患者本人由来のiPS細胞から作製したシート状の網膜色素上皮を移植する世界初の臨床研究をはじめとして、本プロジェクトにおいて数多くの成果が生まれるなど、神戸アイセンター病院を中心に網膜再生医療の早期実用化に向けた取り組みが進められております。

神戸アイセンターは、眼科病院をはじめ、基礎研究部門やロービジョンケア機能をひとつ

の建物内に一体的に備え、再生医療という最先端の医療技術の提供だけでなく、視覚障害者の生活の質を向上させるさまざまな取り組みも行っている国内唯一の施設であり、開設より5年間、眼科領域の医療水準の向上や視覚障害者の社会復帰支援の取り組みについても先進的な役割を果たしてまいりました。

今後も、眼科領域における地域の基幹病院として市民に最適な医療を提供することはもちろん、世界最先端の医療の創出にチャレンジし続ける施設であるために、神戸市といたしましても関係機関と連携を図りながら、積極的に支援をしてまいりたいと考えております。

関係の皆様におかれましては、今後とも神戸アイセンターに対しまして、一層のご支援、ご協力を賜りますよう、心よりお願いを申し上げ、感謝と御礼のご挨拶とさせていただきます。



神戸アイセンター5周年記念 ご挨拶

地方独立行政法人神戸市民病院機構 理事長

橋本 信夫

Hashimoto Nobuo

神戸市民病院機構を代表して、一言ご挨拶申し上げます。

神戸アイセンターは「研究所」、「病院」、そして「ロービジョンケア」からなる複合施設としてスタートし、初期構想を着実に実践しながらめでたく創設5周年をむかえることができました。

神戸アイセンターは、従来の医療の在り方の壁を破るという意味で極めて革新的です。疾病に対し総合的にアプローチするという意味でかつてなく戦略的です。基礎研究、臨床応用、治療を一連の繋がった流れとして組織化することによってその3者間でのフィードバックを最大化することに成功しています。また、医療のみならず、リハビリから社会復帰へのサポートという従来ばらばらであった作業を一つの流れとして具現化しています。さらにそこから生まれるノウハウを事業化するという機能も持つことによって実社会にしっかり根を下す組織となっています。

このようなアイセンターの基本構想と実践、それに基づくこの5年間の実績は眼科医療のみならず今後の日本の医療全体の在り方に大きなヒントを与えるものと嬉しく思っております。言うまでもなく、高橋政代先生、栗本康夫先生、三宅養三先生をはじめとするセンター構成員の皆さんの最先端のその先を行く発想力と実行力そして協調力によって生み出されたものであります。

神戸アイセンターのなかの神戸アイセンター病院は神戸市民病院機構に属する市民病院という外部の目からはいささか分かりにくい組織ではあります。神戸アイセンター病院は神戸市民病院機構の第4番目の病院として隣接する中央市民病院から分離独立する形でスタート

しました。他の3病院は総合病院であり、そのなかで神戸アイセンター病院の母体である中央市民病院は高度先進医療を主体とした全国有数の中核総合病院であり、またその救命救急センターは厚労省評価で8年連続日本一という実績を誇るものであります。当初、そのような総合病院から眼科を分離独立させることには異論もあったと思いますが、眼科の一般外来・診察は神戸アイセンター病院で行い、眼科救急医療は中央市民病院救急外来で行うという機能分担を明確にすることによって、同じ市民病院機構の隣接する二つの病院がうまく共存することに成功しました。市民病院機構としては可能な限りオープンでフラットな形を維持できるようサポートしていきたいと思っております。このようなオープンでフラットな連携体制はさらに神戸ポートアイランドの医療クラスターを形成する幾つもの病院間で、さらには神戸医療産業都市を形成する多くの企業との間で深まってゆくことを確信しております。

皆様のご理解とご支持をお願いいたします。



神戸アイセンター病院の5年間

神戸市立神戸アイセンター病院 院長

栗本 康夫

Kurimoto Yasuo

神戸市立神戸アイセンター病院は令和4年12月1日をもって創立5周年を迎えました。この5年間、当院に多大なる御指導、御支援、および御協力を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

神戸アイセンター病院は神戸市立医療センター中央市民病院眼科と先端医療センター病院眼科を統合する形で眼科診療機能を拡充し、神戸市の基幹病院として眼科地域医療の中核を担うと同時に理化学研究所と共同で眼のiPS細胞治療の臨床応用など世界最先端の医療開発を行うことを使命として設立されました。さらに、神戸アイセンタービルに入居する視覚障害者を支援する公益社団法人NEXT VISIONと協力して、現在の医学では視機能の十分な回復が得られず視覚障害が残ってしまった患者さんのリハビリテーションや社会復帰など多方面の支援を行うことも当院のもうひとつの重要な使命です。

この5年間を振り返ってみますと、眼科専門病院として院内のシステムを眼科診療に最適化することで、限られた医療資源でより多くの患者さんに質の高い眼科医療を提供することが出来るようになったことを実感しています。アイセンター病院への移行により眼科地域医療の中核病院としての機能は中央市民病院眼科時代よりも強化されたと考えています。また、緊密に研究協力してきた理化学研究所の網膜再生研究チームが当院に合流する形でアイセンター病院研究センターを立ち上げ、新型コロナ感染症パンデミックの影響を受けながらも世界初の網膜iPS細胞治療を臨床実施し、遺伝性網膜疾患における遺伝子診断と遺伝カウンセリングの臨床研究を進めて先進医療認定を取得するなど、新しい診断と治療の開発も推進して参りました。こちら

も先端医療センター病院眼科時代よりもスムーズに臨床研究を進められています。さらに、NEXT VISIONが運営するビジョンパークを病院の正面に配置して視覚障害者の支援機能を充実させ、中央市民病院時代と較べて桁違いに多数かつ多様な視覚障害者支援を行う事も出来ました。

院内的には、眼科医や視能訓練士などの眼科専門職は元より病院の全ての職種がそれぞれの職分において眼科のプロになること、病院職員も派遣職員も委託職員も当院で働く全ての職員が一丸となって眼の病気に苦しむ患者さんのためにそれぞれのベストを尽くすという理念を共有すること、患者さんのために一生懸命頑張ることが職員自身の人生をより良くすることに繋がる職場にすること、を目指して参りました。いずれも未だ道半ばではありますが、良い人材に恵まれ、年を追ってあるべき姿に近づいていると感じております。

今後の展望と致しましては、地域の医療機関との連携をさらに強化して眼科地域医療の中核病院としての機能を充実させ神戸医療圏の住民の眼の健康を包括的に守っていくこと、網膜・視神経疾患に対するiPS細胞治療や遺伝子治療の開発を進めることで世界中の眼の難病に苦しむ患者さんに貢献していくこと、そしてNEXT VISIONと協力して神戸市医療圏だけでなく日本中の視覚障害者の生活をより良いものとするために尽力して参りたいと考えています。

眼の病気や機能障害に苦しむすべての人に現時点での最善の解決を提供できるアイセンターであるべく全力を尽くして参る所存です。引き続き、御支援・御指導を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。



NEXT VISIONの役割と今後の展望

公益社団法人 NEXT VISION 代表理事

三宅 養三

Miyake Yozo

公益社団法人NEXT VISION (NV)が神戸アイセンターで活動を開始してから5年が経過し、初期の目標を振り返りながら今後の展望を語りたいと思います。神戸アイセンターの中の最も重要な場所に設置されたNVのVision Parkを核として、視覚障害者に対する直接の医療提供・相談に加え、isee!運動や種々のプロジェクトを駆使した多方面に渡る支援活動も推進してまいりました。

高橋政代先生のグループにより始められたiPS細胞を用いた網膜治療以後、再生医療、遺伝子治療、人工臓器等に代表される眼の先端医療が世界で活発に行われるようになった昨今ですが、まだまだ満足できるような視機能の向上は得られておりません。NVの構想は、先端医療がさらに発展しても、患者様が満足されるための足りない点を補充するにはリハビリテーションを含むロービジョンケアは極めて重要な医療で、最終的には雇用を含む患者様の社会参加につながるのがその目標です。神戸アイセンターを軸として基礎研究、応用研究、臨床研究を基にした先端医療を治療に結びつけ、これに加えてNVはロービジョンケアやリハビリテーションの力で患者様の雇用や社会参加に一気通貫でつなぐ世界に類のない組織を目指しております。

NVの設立の心は視覚障害者の日常生活、就労などの社会参加活動に対する様々な支援、視機能向上・回復等のためのリハビリテーションを含む技術開発、更には眼科領域における調査・研究を行うことで、これによりすべての視覚障害者の福祉向上と科学技術の発展に寄与することです。神戸アイセンターの現場である

Vision Parkに訪問できない全国の人々にむけての情報ケアとしてオンライン動画配信による携帯型端末の使用法や活用法、社会復帰や社会活動のカウンセリングや連携事業等々により、今では福祉から教育へ、そして就労へのネットワークが広がりつつあります。

今後の展望として研究開発事業は特に目指すべき方向の一つです。情報化社会が進む中で見えない、見にくい方の生活就労支援に寄与する最新テクノロジーに関する研究開発により社会参加、社会戦力化の向上を目指します。

毎年行っておりますisee! Working Awardsはこのような研究開発等のアイデアに対するコンテスト事業で、毎年多くの方々が公募に応じて下さいます。

最後になりましたが、この5年はコロナ禍もあり、苦勞したり学んだことも多々ありましたが、この間に大変なご支援、ご協力を賜った視覚障害の方々、患者団体、教育・研究機関、高額のご寄付を賜りました皆様、企業パートナー、Vision Parkのボランティアの皆様等に厚く御礼申し上げます。今後も行政とも一体となり目標に向かって邁進したいと思います。NVの果たす役割がいかに重要かを示す勝負の時代となってまいりました。皆様のますますのご協力を宜しくお願いいたします。



5周年に寄せて

株式会社ビジョンケア 代表取締役社長

高橋 政代

Takahashi Masayo

アイセンターは京都大学病院の眼科に勤務していた頃から構想していたことでしたが、惜しくも大学では実現しませんでした。平成18年に神戸の理化学研究所（理研）に来て医療産業都市構想と神戸市の驚くほど柔軟で前向きなサポートを理解するにつれ、ここなら理想のアイセンターができるのではないかと考え、神戸に骨を埋めようと思ったものです。

それでも再生医療という全く新しい分野の治療を実現すること、医療と患者ケア（福祉）を一体化すること、未来の新しい医療を作るための事業を行うこと、これらをすべて満たす形は難しいものでした。理研、神戸アイセンター病院、公益社団法人NEXT VISION、そして株式会社ビジョンケア、4つのバラバラの組織が組み合わせられてできたのが神戸アイセンターでした。その難事業をさまざまなプロジェクトを成功させてきた奥田圭太さんがマネージしてくれて、今も会社の資本政策や全体をアドバイスしてもらっています。良いビジネスパートナーに出会えたことが幸運でした。

そして5年が経ち、思い描いていたアイセンターができてきました。病院は評判が良く、網膜色素変性の患者さんの間ではSNSで神戸に行った？という会話がなされ、「いつかは行きたい神戸アイセンター」という言葉が記載されたりして嬉しい限りです。また、再生医療の臨床研究を繰り返すことで、再生医療を熟知した臨床チームができ、これは世界でも類を見ないことです。研究は神戸の理研で最大の研究室であった網膜再生医療研究開発プロジェクトがクローズし、ほとんどのメンバーが会社に移って同じ目的を共有してくれています。その間、研究を止めることなく、

走る列車から列車に移るような大移動でしたが、緻密な計画で無事ビジョンケアグループとして立ち上がりました。

今では日本のTop5バイオベンチャーに選ばれるまでになりました。患者ケアはNEXT VISIONが福祉や教育分野の施設と繋がり、これら分野のハブとなって横のつながりも提供しています。何より患者さんからもドクターからも喜ばれ頼りにされる存在となりました。同じような施設を作りたいと言ってくれる声も聞きます。

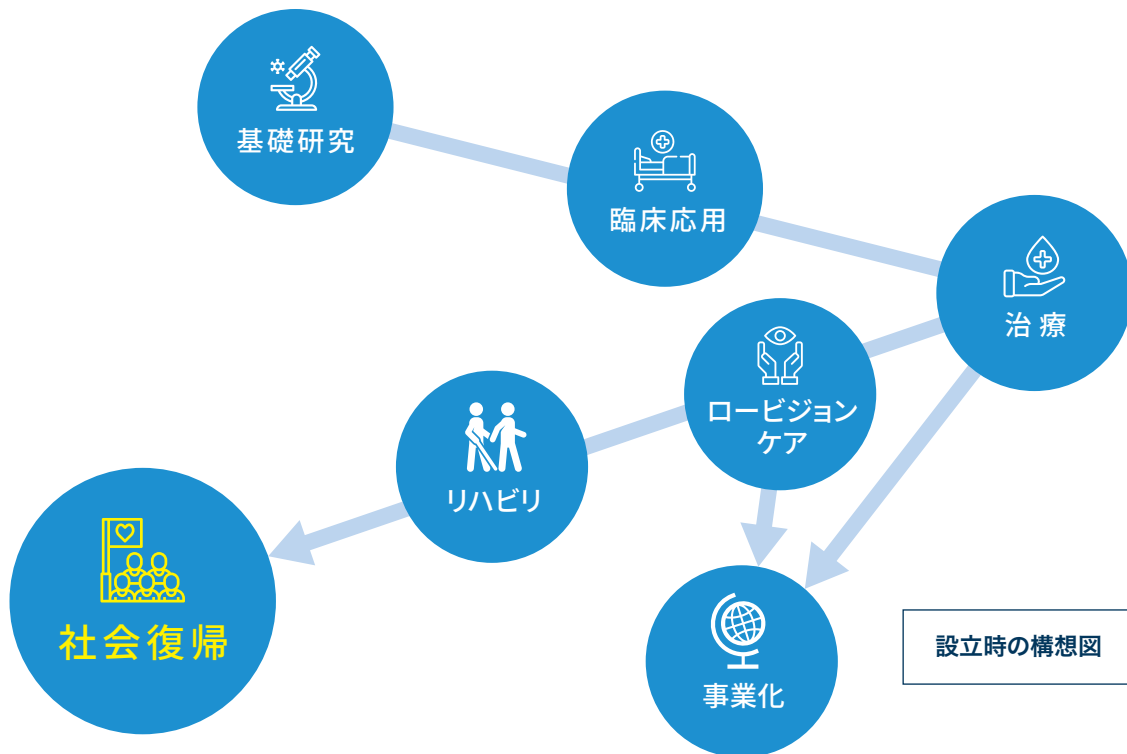
これまで、iPS細胞由来網膜色素上皮細胞移植は安全性を確認し、最適な治療の形を決定することができました。視細胞移植に関しても世界初の臨床研究が無事終わろうとしています。今後、いよいよ治療として広げていく段階になります。日本は再生医療に適した規制を持っていますので、それを活かして、世界の中でも神戸に來れば治療できるという状態にしたいと思います。また、再生医療は高額ですので、持続可能な医療とするためには医療システムの改革も必要です。研究とともに細胞製造の拡充、医療制度の整備、保険の構築など、様々なことにチャレンジして完成させていきたいと思っています。今後もよろしくお願いいたします。



構想

Concept

眼科領域の基礎研究から社会復帰支援まで 一貫して対応する全国初の施設



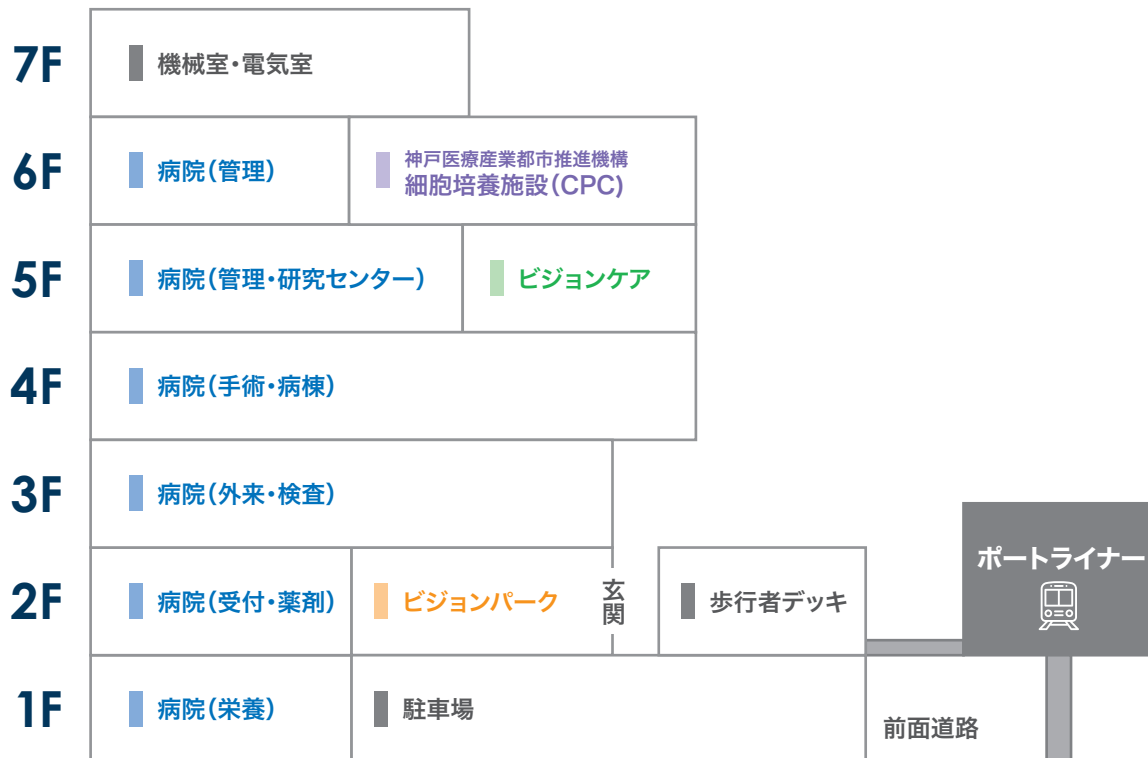
- ・神戸アイセンターは、国家戦略特区プロジェクトとして、iPS細胞を活用した世界初の臨床研究である網膜治療をはじめとする再生医療の迅速な実用化などを図るため、基礎研究から臨床応用、治療、リハビリ・生活復帰支援までトータルで対応する施設です。
- ・神戸アイセンター病院では、標準医療を確実かつ高水準で行うとともに、眼科領域の再生医療分野を中心に新しい治療を世界に先駆けて享受できる最先端の高度医療を行います。
- ・同時に再生医療などの最先端医療とともに重要視しているのが、公益社団法人NEXT VISIONが行う眼の障害に対する総合的なサポート＝ロービジョンケアです。神戸アイセンターの玄関口に、ビジョンパークを整備し、QOL（生活の質）を向上させるデバイスや、様々な支援団体を紹介するなど、視覚に障害が残った方を支え、できるだけ不自由のない生活を営めるよう、社会で活躍できるようサポートしています。
- ・さらに、株式会社ビジョンケアを中心に、神戸アイセンターで生まれた様々なシーズを育成し、事業化に繋げる取組みも行っています。
- ・世界最先端の再生医療等の研究、質の高い眼科治療、そしてロービジョンケアを一体的に提供し、ここ神戸アイセンターから眼科医療の未来を切り開いていきます。



概要

Overview

「研究所」、「病院」、「ロービジョンケア」の異なる施設を
機能的に水平、垂直に積層させ、各施設の有機的なつながりを実現



所在地：神戸市中央区港島南町2丁目1番8

施設名：神戸アイセンター

建物用途：病院、事務所、研究所

階数：地上7階

敷地面積：2,000㎡

構造：鉄骨造

駐車台数：四輪車21台、自動二輪車2台



構想から開設まで

2014

(平成26年)

2月

神戸アイセンターの
整備を発表
(先端医療振興財団)

5月

国家戦略特区指定の
閣議決定

8月

一般社団法人として
NEXT VISION設立

12月

NEXT VISIONが
公益社団法人に移行

2016

(平成28年)

7月

病院の運営主体を
先端医療振興財団から
神戸市民病院機構に変更

8月

神戸アイセンター病院
整備室設置

2017

(平成29年)

3月

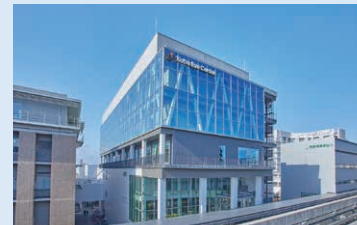
株式会社ビジョンケア(VC)設立

10月

神戸アイセンター病院
開設許可

11月

建物使用許可
工事竣工



12月

神戸アイセンター
開設

2018

(平成30年)

12月

開設1周年記念講演会
開催



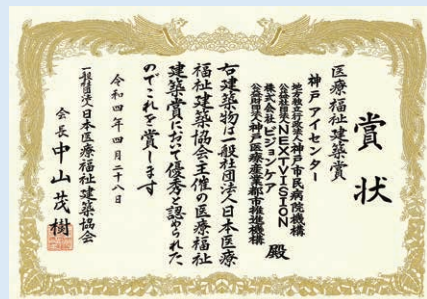


2022

(令和4年)

4月

医療福祉建築賞受賞



2021

(令和3年)

3月

株式会社VC Cell Therapy
設立

2022

(令和4年)

11月

Joint French-Japanese
Scientific Seminar 2022(主催)

2020

(令和2年)

8月

株式会社VC Gene Therapy
設立



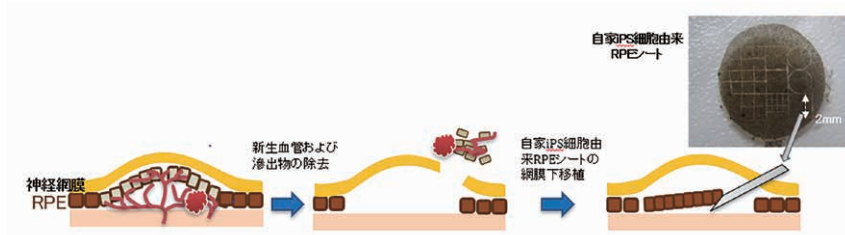
iPS細胞を用いた臨床研究の成果

2014
(平成26年)



網膜色素上皮 (RPE) 細胞シート (自家) 移植

世界初のiPS細胞治療。滲出型加齢黄斑変性の根治的な新規治療法の開発を目的として、患者本人のiPS細胞から作製したRPEシートの網膜下移植を臨床研究として1例実施した。ヒト初のiPS細胞治療として安全性の確認が本臨床研究の主たる目的であったが、安全性の確認に加えて本治療の有効性が示された。(先端医療センター病院)。

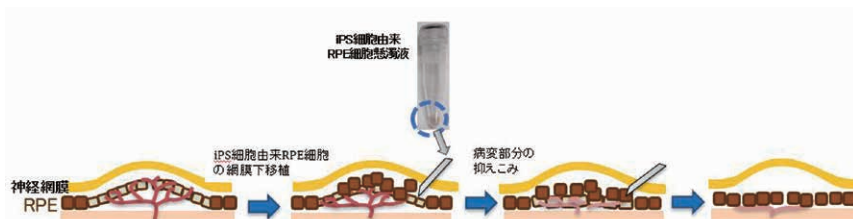


2017
(平成29年)



網膜色素上皮 (RPE) 細胞懸濁液 (他家) 移植

世界初の他家iPS細胞治療。他家iPS細胞由来RPE細胞懸濁液移植の安全性を確認するとともに視機能に対する有効性を評価することを目的として、免疫型をマッチした他人のiPS細胞より作製したRPE細胞を懸濁液として網膜下に移植した。中央市民病院4例、大阪大学医学部附属病院1例の計5例の滲出型加齢黄斑変性患者に移植手術を実施し、他家iPS細胞治療の安全性と一定の有効性が示された。



2020
(令和2年)



視細胞 (網膜シート) (他家) 移植

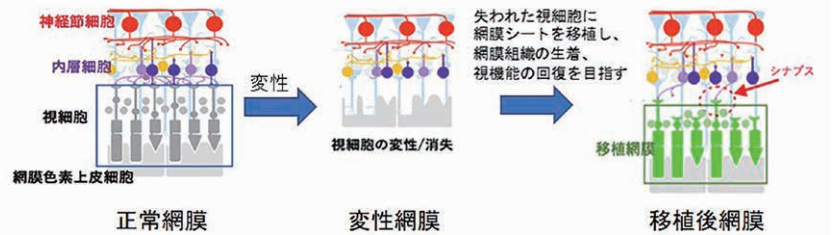
他家のiPS細胞より作製した神経網膜シートを網膜色素変性患者の網膜下に移植する世界初の治療を臨床研究として実施した。移植網膜組織の生着と残存する患者網膜神経回路との結合により視機能の回復を目指すものであり、今回の臨床研究はその第一歩として安全性の確認を主な目的として、2例の移植手術を実施 (神戸アイセンター病院)。iPS細胞由来神経網膜移植の安全性と一定の有効性が示された。



2021
(令和3年)



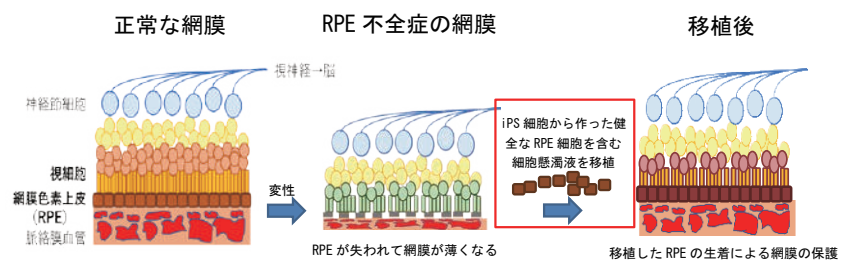
<概要図>



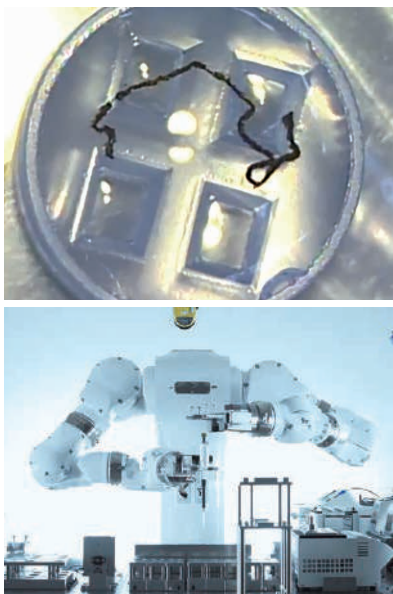
網膜色素上皮(RPE)細胞懸濁液(他家)移植

これまでのRPE細胞移植の経過を踏まえ、移植の対象疾患をRPE不全のある疾患全般に拡大し、新しい治療法の有用性と安全性を確認することを目的として、遺伝性RPE不全疾患の患者1例に移植手術を実施(神戸アイセンター病院)。

<概要図>



2022
(令和4年)

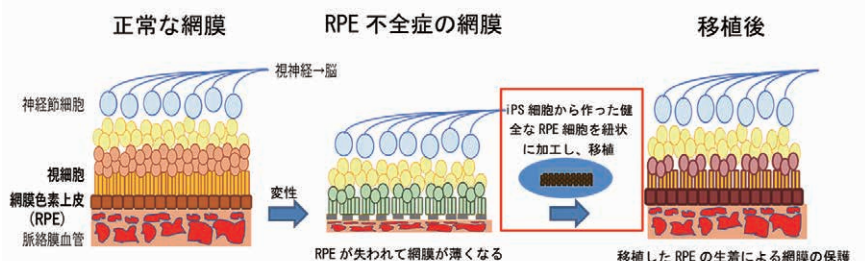


ロボテック・バイオロジー・インスティテュート株式会社
汎用ヒト型ロボットLabDroid「まほろ」

網膜色素上皮(RPE)細胞凝集紐(他家)移植

2021年に実施したRPE細胞移植に関し、移植細胞の更なる生着の向上が期待できる紐状の剤型へ変更し、また、細胞調製作業の一部に汎用ヒト型ロボットLabDroid「まほろ」を利用する新たな臨床研究として開始。

<概要図>



神戸アイセンター 病院

名 称：神戸市立神戸アイセンター病院
所 在 地：神戸市中央区港島南町二丁目1番地の8
病 床 数：30床（個室6室、4床室6室）
診療科目：眼科
院 長：栗本 康夫
開 設 者：地方独立行政法人神戸市民病院機構
理事長 橋本信夫
開 院 日：平成29年12月1日

安全で質の高い医療の提供

中央市民病院及び先端医療センター病院の眼科機能を集約・拡充して平成29年12月に開院しました。眼科標準医療及び高度専門医療を提供し、より安全で精度の高い最先端の手術等に取り組むとともに、増加する手術等にも対応できるよう診療機能の強化を図りました。

眼科救急については、日中は当番医、休日夜間はオンコール体制による24時間365日体制で、中央市民病院との連携のもと対応しました。

また、令和3年度には「遺伝性網膜ジストロフィーにおける遺伝子診断と遺伝カウンセリング」が先進医療として承認されました。

さらに、オープンカンファレンスの開催や地域医療機関向けアンケートの実施等、地域医療機関との連携強化に取り組みました。



誘導研修



世界緑内障週間啓発活動

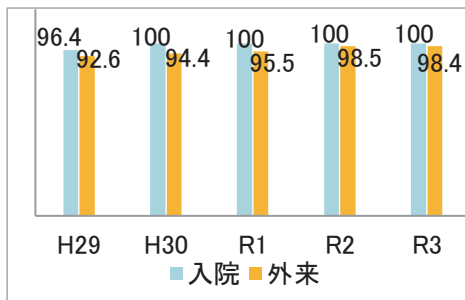
患者支援及び患者サービス

公益社団法人NEXT VISION協力のもと、視覚に障害が残った方の社会生活への円滑な復帰支援を進めることを目的とし、生活・就労相談、視覚的補助具・補装具の紹介や情報発信等、視覚障害者への支援を継続しました。

また、外来患者や退院患者へのアンケートを実施し、食事の工夫や待ち時間対策等の改善、歩行誘導研修等を行い、患者満足度調査では、入院では100%を達成するとともに、入院外来とも高い満足度となりました。

ホームページや患者向け広報誌、さらにはiPS細胞移植に関する記者発表を行い、積極的に情報発信をするとともに、国内外からの視察の受け入れや世界緑内障週間に参加し定期検診の推奨を行いました。

—— 患者満足度調査(満足、やや満足)の推移(%) ——



眼科に特化した患者給食の工夫

治験・臨床研究

iPS細胞を用いた臨床研究への取り組みをはじめ、開院時には理化学研究所(生命機能科学研究センター網膜再生医療研究開発プロジェクト)と連携して、眼科領域における新たな臨床研究・治験に取り組みました。その後、理化学研究所から研究を継承し、現在は、株式会社ビジョンケアグループとの連携等により、研究を進めています。

この間、研究機能の強化として、研究室や特定細胞加工施設(CPF)の整備や汎用ヒト型ロボット(まほろ)ブースの拡充、研究支援機能や安全管理業務等も整備しました。



医療人材育成

開院当初から積極的な論文作成の推進や、特に学会発表については、医師に加えて各部門から積極的に参加できるように、研究費の配分ルールについて整備しました。

医師による多職種参加型の眼科疾患勉強会やアイセンター全体研修を開催する等、眼科の専門性の向上を図るための取り組みを行ってきました。

また、若手人材の研究機会の確保のため、連携大学院制度や大学院リサーチ・アソシエイト制度を整備するとともに、パリ・アイセンター等海外との交流を進めています。



全体研修



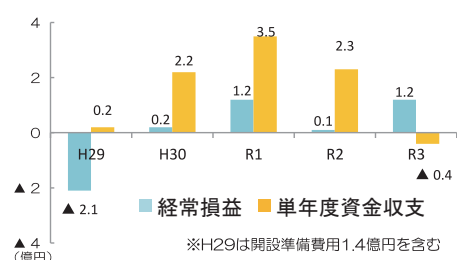
海外との交流(フランス・中国大連)



経営改善への取り組み

当初計画として開設3年目の黒字を目標としていましたが、患者数増加への対応を行い、手術件数や硝子体注射の増等で計画を上回る収益を確保し、費用面でも材料費等費用削減に取り組みました。新型コロナウイルス感染症の影響もありましたが、患者満足度向上策や地域医療機関への広報等を行うとともに、部門ごとにも経営改善の取り組みを進め、2年目から連続して黒字となりました。

—— 経常損益・単年度資金収支の推移 ——



NEXT VISION (Vision Park)

名 称：公益社団法人NEXT VISION
所 在 地：神戸市中央区港島南町二丁目1番地の8
神戸アイセンター2階
設立年月日：平成26年8月27日 一般社団法人設立
平成26年12月24日 公益社団法人へ移行
代 表 理 事：三宅 養三
(名古屋大学名誉教授・愛知医科大学前理事長)

NEXT VISION (Vision Park) の役割

平成29年12月にオープンしたVision Park(ビジョンパーク)は、神戸アイセンターの2階にあります。神戸アイセンターのエントランスと神戸アイセンター病院の待合を兼ねており、病院に来られる患者さんだけでなく、病気や障害のあるなしに関係なく、どなたでも自由にそれぞれのニーズに合わせた使い方ができるのが大きな特徴です。

私たちは「見えない・見えにくい」ことを障害と考えるのではなく、「見えない・見えにくい」ことにより必要な情報を得られないことが障害であり、情報不足によって、できるはずのことをあきらめてしまったり、不必要な不安を感じることが障害だと考えています。

そこで、必要な情報を得られない状態、「情報障害」をなくすためにVision Parkを設置しました。



エントランス



アクティブエリア



キッチンエリア



オンライン相談

Vision Parkでの相談と情報提供

患者さんはVision Parkを待合室として利用し、診察や検査の待ち時間にアウトリーチ活動を行っている地域の支援機関、教育機関、患者団体等の方に直接相談をしたり、アドバイスを受けることができます。

神戸アイセンター病院では、iPS細胞を用いた再生医療など最先端の研究開発を行う研究センターと連携し、2,000例以上の網膜色素変性症に特化した診療を行っています。私たちは病院と連携し、これまでに2,300人以上の方に視覚障害リハビリテーションなどの情報を提供しました。

情報を必要とする方は福祉施設や役所に行かなくても、Vision Parkを訪れるだけで必要な情報を適切なタイミングで入手することができるのです。また、COVID-19感染拡大に対する生活習慣の急速な変化に対応し、安全を確保しながらICTを活用したオンライン相談および情報提供を行えるようにしています。

NEXT VISION(Vision Park)



©2017 Masato Chiba

リラクゼーションエリア



©2017 Masato Chiba

リーディングエリア



©2017 Masato Chiba

シミュレーションエリア

NEXT VISIONが開催するセミナー・イベント

Vision Parkでは相談や情報収集のほか、NEXT VISION主催の講習やセミナーなどを行っており、どなたでも参加できます。これまでに14,500人以上がセミナーやクライミング、就労やデジタル機器に関するさまざまなセミナーやイベントに参加されました。

また、オンラインを活用したセミナーの参加者は神戸市だけでなく全国に広がりました。



みちびクライミング

isee!運動 視覚障害者のホントを見よう

近隣の医療機関や教育機関、福祉団体、企業、市民などと多角的・多面的に連携し、見えない・見えにくい人だけでなく、すべての人に視覚障害リハビリテーションの情報を提供し、視覚障害に対する正しい理解と協働を促すisee!運動を行っています。

「isee!運動 視覚障害者のホントを見よう」について詳しくはウェブサイトをご覧ください。



<https://nextvision.or.jp/isee/>

すべての人のWell-being向上を目指して

すべての人のWell-being(自分らしく日々を楽しむ)向上を目指して、NEXT VISIONは医療と福祉そして社会をつなぎ、すべての人が豊かな生活を送り、Well-beingな状態であるために必要な情報、関係性等のあらゆるモノ・コトを発信します。病気や困難があっても、年齢や性別、国籍などにも関係なく、自分らしくあり続けることができる社会。そんな社会のピースのひとつとして、NEXT VISIONがすべての人、企業、団体、考えや思いをつなげ、新しい幸せのカタチを作るお手伝いをしたいと考えています。

Vision ParkはWell-beingな人の姿やワクワク・ドキドキする「何か」に触れることで、訪れた人が自分の「好きな」「したい」ことに挑戦できる勇気をもらい、何かを始めるきっかけが生まれる場です。

ぜひ、みなさんもVision ParkであなたのNEXT VISIONを体感してください。



公式ウェブサイト <https://nextvision.or.jp/>

ビジョンケア

名 称：株式会社ビジョンケア
 所 在 地：神戸市中央区港島南町二丁目1番地の8
 神戸アイセンター5階
 代表取締役社長：高橋 政代
 設 立 日：平成29年3月10日
 資 本 金：2000万円

神戸アイセンターのつなぎ役として

ビジョンケアグループの親会社である株式会社ビジョンケアは平成29年の神戸アイセンターの誕生と共に設立しました(当時は現在CFOである福田卓真が社長)。設立時の神戸アイセンターは図2のように理化学研究所(理研)と、その研究を基にした再生医療臨床試験を優れた地域医療と共に行う神戸アイセンター病院、医療と福祉をつなぐ機構として患者ケアの公益社団法人NEXT VISION、そしてそれら3つの公的な機関が様々な規制のために患者に良いことができない場合に企業と組み合わせて実現できるよう株式会社ビジョンケアが解決する、4つの機関が寄りあった今までにない組織としてスタートしました。これら機関が協力することで、研究と治療開発のスムーズな移行、医療と福祉の融合、再生医療に適した速やかな治療開発が行えるユニークなエコシステムとして、世界にも類を見ないアイセンターとなりました。これは研究者、臨床家、福祉関係者、企業人、皆が同じ目的を持つことで初めて実現できたものです。

図1 ビジョンケアグループからみた現在の神戸アイセンター構想(令和4年11月)

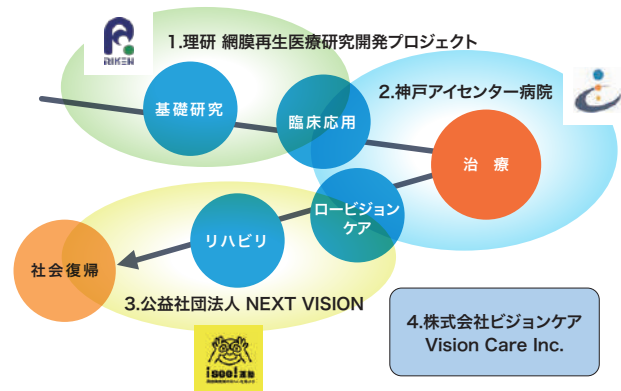


5年の変化、ビジョンケアグループの始動

治療研究、病院、NEXT VISIONが順調に動き出し、令和元年8月に再生医療を本格的に事業化して一般治療とするために、理研を退職した高橋が代表取締役社長となり会社が本格的に動き出しました。その後、遺伝子治療開発のためのVC Gene Therapy及び細胞治療開発のためのVC Cell TherapyをVision Care Inc.の子会社として設立してビジョンケアグループとなり、治療開発が加速しています。

グループの理念(ビジョン)は「すべての患者さんのために、あらゆる解決策を」であり、目指すミッションは「10年以内に網膜外層疾患の治療法確立」です。

図2 神戸アイセンター構想 設立時(平成29年)



10年目へ向けての挑戦

AI時代には医療だけでなくデバイスや医療システム自体が患者の生活を改善し満足してもらうための手段となります。そこで医療に留まらず、あらゆる解決策を開発し社会実装することが会社の役割でビジョンです。また具体的なミッションは理研の網膜再生医療研究開発プロジェクトの研究室からほとんどの研究者が移籍してビジョンケアグループで研究をしていますので、世界最高レベルの細胞治療と遺伝子治療の研究を変わらず続けることができおり、さらにコーポレート部門として優秀な企業人が新たに集まり、世界に治療を広げるために活動しています。また、神戸アイセンター病院や会社とは別に日本全国および世界から再生医療について問い合わせてくださる患者さんのためにオンライン診療のクリニックを令和4年8月に立ち上げました。このように5年でそれぞれの組織の内容が充実し発展し続けています。

図3 ビジョンケアグループの構成



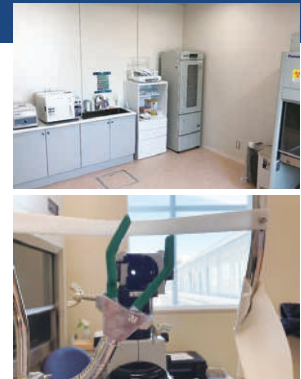


関連企業

公益財団法人 兵庫アイバンク

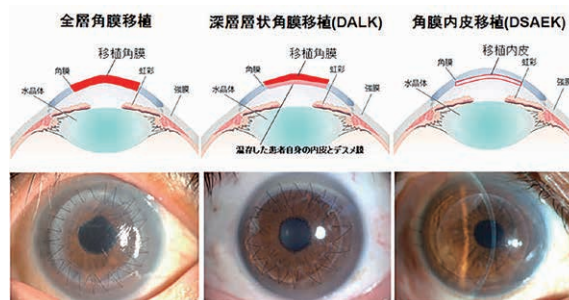
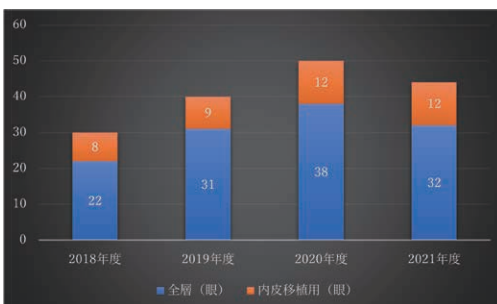
事業内容

兵庫アイバンクは、兵庫県下を中心とした角膜・強膜の移植術に寄与するために平成6年5月に設立されました。角膜移植を必要とされる患者様の視力回復のために眼球提供（献眼）を賜り、移植医療によって視力回復をして頂くための橋渡しの役割を担っています。また、移植医療を知っていただくための普及啓発事業も行っています。iPS細胞をはじめとする新しい治療法が開発されつつありますが、iPS細胞で可能な角膜移植術は現在のところ角膜移植全体のごくわずかであり、大多数の角膜移植術には、献眼していただく角膜が今なお必要となっております。移植医療を広く知っていただき、献眼しても良いと意思表示をされておられる方は、「人生最後の贈り物」としてアイバンク活動にご協力賜れば幸いです。



施設内での事業

神戸アイセンター設立時より5階にて、ご提供賜りました眼球を移植に繋げるための処理や検査を行っています。角膜及び強膜の幹旋を安全に行うためには欠かせない業務を担っています。近畿圏を中心とした西日本の拠点として稼働しており、眼科医療発展におけるパーツ移植に対応できる日本でも数少ないアイバンクとして活動しています。角膜は目の表面にある透明な膜で、その構造は大きく5層に分けられます。特に角膜内皮細胞の数が乏しくなり、角膜の透明性の維持が困難となる水疱性角膜症という疾患については、早期であれば角膜内皮移植術を選択されることがあり、この手術はアイバンクでの検査によって健常な角膜内皮細胞が確認された薄い移植片を前房内から空気を用いて角膜後面に接着させることにより角膜内皮機能を回復させる手術です。この手術に対応するために特殊な医療機器を用いて提供いただいた角膜の角膜内皮細胞のついた薄い移植片（約100～200μm）を作成し、角膜内皮移植術に活用するための作業もこのラボで実施しています。



神戸医療産業都市推進機構

事業内容

細胞治療に使用する細胞製剤の品質規格に関する研究、製造工程の改善提案、薬事開発支援、細胞製剤の受託製造（CMO事業）、製造管理情報の統合化研究、等を行っています。品質規格に関する研究では、iPS細胞等の多能性幹細胞や間葉系幹細胞、さらにはCAR-T細胞の維持・分化に関して有用なバイオマーカーを同定し、新たな産業化に繋がりました。

また、製造管理情報の統合化を実現する「クラウド型製造管理システム」の開発に取り組んでおり、細胞製造情報のIT化を通じた作業効率の改善と製造コストの軽減に取り組んでいます。

施設内での事業

CMO事業として、神戸アイセンター6Fの細胞製造施設（CPC:Cell Processing Center）において、平成30年から大手グローバルファーマの細胞製剤の治験薬製造をスタートしました。更に令和2年にはPMDA(医薬品医療機器総合機構)によるGCTP(再生医療製品の製造管理及び品質管理の基準に関する省令)の適合性調査を経て、市販製品の製造所承認を受け、市販製品の製造・供給を開始しています。神戸アイセンターのCPCでは、患者様の治療に使われる治療薬としての細胞製剤を製造しております。





神戸アイセンター開設5周年記念誌

2022年(令和4年)12月発行

発行 神戸アイセンター5周年記念行事実行委員会
〒650-0047 神戸市中央区港島南町2-1-8
TEL:078-381-9876

